

最良のフルコンタクト空手を未来へ

共感でできる極真を造り上げるために

松井章奎と増田章。
極真空手華やかかなりし時代を彩った二人の名選手が
極真会館館長、I B M A 極真会館増田道場主席師範
と立場を変え、再会を果たした。
フルコン空手界の中心的指導者となった二人の見据える
現在、そして今後のフルコン空手のあるべき姿とは。
取材・文◎加藤聡史



松井章奎

増田章

1963年生まれ。1976年、13歳で極真空手入門、入門後約一年で初段取得。1980年、第12回全日本大会に初出場4位入賞。1981年、第13回全日本大会3位。1982年、第14回全日本大会3位。1983年、第15回全日本大会8位。1984年、第3回全日本大会3位。1985年、第17回全日本大会優勝。1986年5月、百人組手を完遂。同年11月、第18回全日本大会優勝。1987年、第4回全世界大会優勝。1992年、本部直轄浅草道場を開設して支部長となる。1994年、大山倍達総裁の後を継ぎ極真会館館長に就任。



Matsui Shokei

写真提供：ワールド空手



Masuda Akira

16歳で極真会館石川支部に入門。19歳で極真会館の第13回全日本空手道選手権大会に出場以降、毎年のように上位進出を果たす。1990年、第22回全日本空手道選手権大会で念願の初優勝を飾る。1991年5月、極真会館総本部にて百人組手を完遂。同年11月、第5回全世界空手道選手権大会で準優勝。全日本大会に8度出場。4年に一度開催される世界大会には4度出場。世界の強豪とも激闘を演じ、極真空手の「時代を築く」。現在、I B M A 極真会館増田道場にて指導するとともに、N P O 法人の理事長を務めている。

松井、増田、両師範の交流の再開

——二人の交流が再開した切っ掛けは？
松井 二十数年前、私が組織を引き継ぐと、当時の支部長の八割がそれを良しとせず極真本体から離れましてしまった。しかし数年後、大山総裁の奥様が亡くなり、葬儀の際「食事でもしよう」と話し、連絡を取り合うようになりました。
増田 数年ぶりに「支えてあげられなくてごめん」と伝えました。やり方が多少違っただけで極真が分裂する事を良い事だとは思っていませんでしたから。
松井 我々極真会館の離散は、多くの人が利害と好き嫌いの感情で別れていった。また増田師範のように間違った情報を聞かされ正義感から別れた人もいた。奥様の葬儀が分岐点となり、その後会うようになりました。それで五年前、彼が「あの時お前を信じてやれず申し訳なかった」と頭を下げたんです。
増田 僕には分裂の責任がある。僕は支部長ではなかったが、組織内で地位も発言力もそれなりにあったと思う。僕も分裂の当事者の一人と言って過言ではないです。

空手を日常生活や人生に活かせるものにするために

松井 でも、晩年は「ただ強いだけじゃ駄目だ。地に沿った基本、理に適った型、華麗なる組手、品格ある空手を我々は目指すんだ」と、極真を理念ある空手だと訴え始めた。「頭は低く、目は高く、口慎んで、心は広く、孝を原点とし、他を益する」と、この精神が目指すのは増田師範が言う世界平和です。そこを目指さないと我々の活動に意味がない。
増田 総裁の言葉には平和の中心となる理念がありません。スポーツも起源を辿れば闘争の技術。だから世界各地に戦うスポーツがあり、それに負けないよう皆で練習していった。そういう本質をスポーツも武道も持つ以上、両者は融合可能です。

松井 スポーツの起源から考えれば彼の言う通りで、そのままでは秩序が乱れ平和でなくなるので、時代と共にスポーツという言葉が定義されるルールが整備され勝敗を楽しむ思想に入れ替わった。
増田 スポーツ化は「秩序形成する事」です。喧嘩も世界中にあるけど、本質は殺し合いまではやらないはず。そこに既にルールがある。やる人、見る人双方の意識が入り、卑怯な振る舞いはせず、やり過ぎないなど社会形成に必要なものと通じる。そこを踏まえて展開されるシステム作りこそ僕が取り組んでいる事です。
松井 社会性を持ち、誰が見ても公正、妥当というの

人類共通の願いです。
松井 大山総裁の晩年の言葉が、総裁が人生を通じて感じた事だと思います。私はそれを文意を咀嚼して伝えてきました。ケンカ空手から始まり、大山道場時代には「百人の弟子より一人の強い弟子がいたら良い」と話した。それが国際空手道連盟極真会館の設立とな

を示し、それを集約して大会・競技会を作らないと。

増田 例えばサッカーならルールを共有し観る人も共感する中で社会性が担保され競争し合って平和に繋がるかも知れない。それは客観化された公正な基準があるから。手数とか勢いとか主観的印象は競争するところじゃない。異論はあるでしょうが、空手を整理整頓し発展させないと。

人間とAIの違いは共感力。極真も直接的に試し合いをする。世界中の連がそのルールを守って戦う。これは共感力を得るための良い手段です。だからやる人間も観る側もより共感を得られる極真空手にしないと。

ルールある競技会は普遍性というか、個人や社会に還元出来るものがある。技術を身に付けるプロセスでの人間的成長。技術を駆使しルールの中で切磋琢磨すると、僕らの概念である「技能」が身に付く。技術をどう使うか、その部分が骨格としてあれば、あらゆる事象に応用出来ます。

松井 競技会が日常生活、人生に反映し得るものでなければ意味がない。自分達のやっている事がどのように実生活に活きるか置き換える応用力を身に付けないと。我々がしているのは生き方の模索です。

組手で対話する

増田 僕の技能論は空手以外のスポーツやビジネスにも置き換えられます。各局面にそれに必要な技術があり、なければ身に付け、それらの技術を運用し、望む

がやがて精神性や道になる。

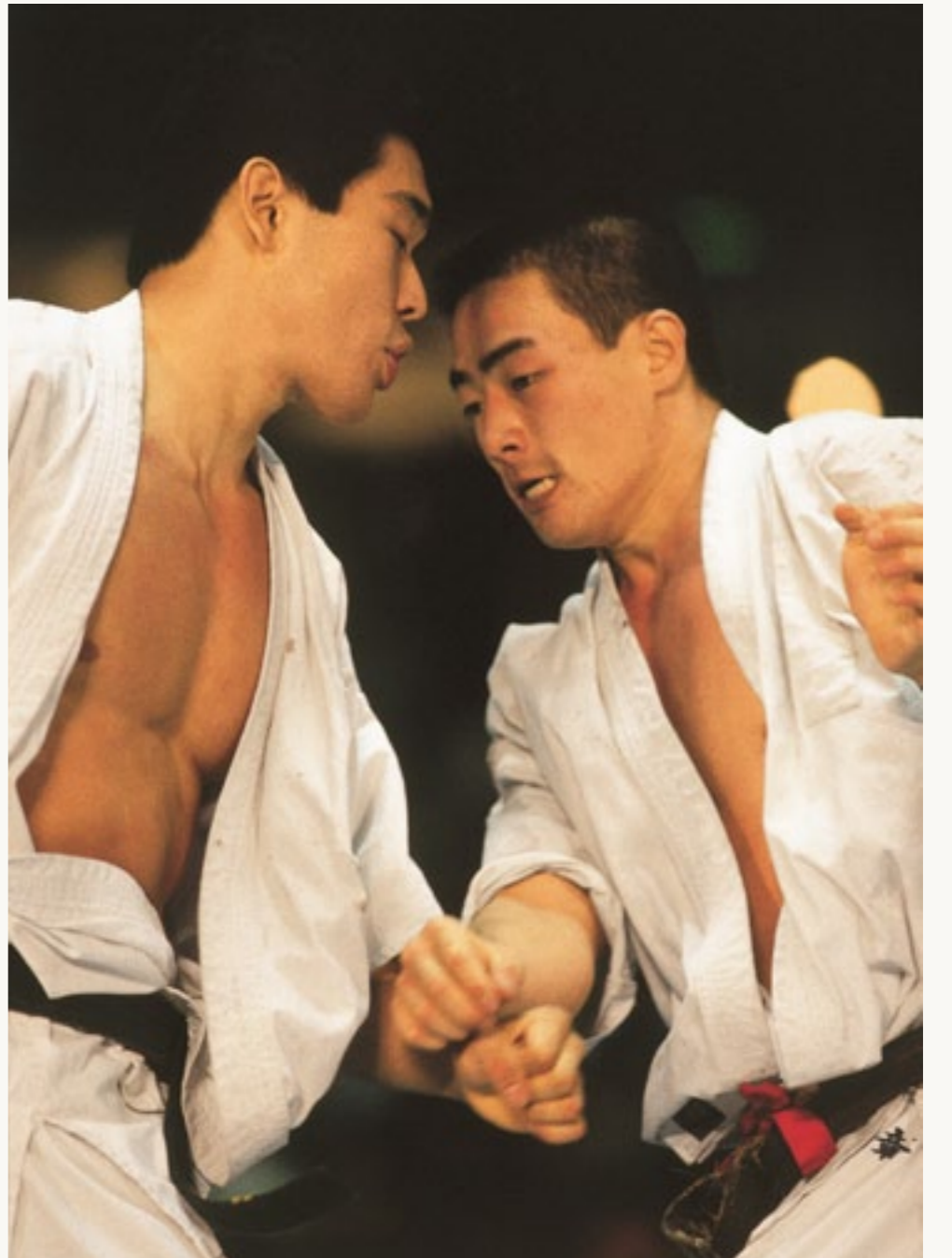
増田 私と館長とは対話のように組手をやっていた。だからこそ17回大会の館長との試合は技能論の説明に使えるんです。

松井 試合をやっても対話出来ない人が沢山います。技でやり取りが出来たのは私の実感として増田師範ら数人だけ。

増田 僕も彼の誰よりも優れた技術、上段回し、後回しを体験しました。技術だけでなく技を使う技能がある。僕もそれを読む。僕はこれが優れた技術を交換する試し合いだと言いたい。

松井 競技者にはその次元を目指して欲しいし、大会上位入賞者はそうあって欲しい。力の強弱、技の関係、息の調整と、大山総裁は言いました。そういうメリハリが本来あるはず。私はスポーツ全てに精通している訳ではないが、ボクシングのハグラーとレナードの試合のように他分野でも凄いなと思うものには純粹に引き込まれます。空手も一般の人がそう思える世界にならないと。

増田 凄さを感じる要素の一つが技術です。極真空手にも技術はある。けどどサツカーやテニスには技能があるんです。技能は戦略に、技術は戦術に関わる。技術を観る人に凄いなと思わせるには技能が必要。相乗効果で技術も更に磨かれる。それが観る人、後輩達に伝わって人材が育つ。競技をそういう場にする事が今後極真空手を広めるポイントだと思ふ。僕は技術と技能を運用的な能力。全部ひっく



1986年11月、代々木第一体育館で開催された第18回全日本空手道選手権大会決勝は、松井、増田両者譲らず延長戦へともつれ込む激戦となった。「私と松井館長は組手を通して対話をしていた」と増田師範は言う。(写真提供：ワールド空手)

結果を得るのが技能です。技術、技能両方兼ねた人はそういませんが、松井館長は上段回し、後回しといった技術と、それらを使いこなす技能もあった。これを生徒に教えないと。

松井 ただ普及するだけでなく、情報をどういう所にどう拡散するか。情報の核になるのが競技会です。競技会にあたり競技をどう作るか、どんな仕来りを設ける

るめて技と認識しがちですが、分けて認識しないと優れた考え方、構造は造れない。

試合を通じて技術、技能を身に付けられる 競技づくりを目指す

——組手を通じた対話を一般道場生が体験するにはどんな仕組みが必要ですか？

増田 僕が体験した技術と技能の世界を体験しようとするなら「突き、蹴りを刃物と思う事」。拳足を一発ももらわないように間合いを操作し位置取りし技を駆使する。この感覚が必要。

松井 それは大きな要素です。私が空手を始めたのは13歳。今の子達はもつと小さい頃から始めますが、同世代とずつとやるので絶対的な力に圧倒される事がな

るか、そこに精神性を見せないと。だから今後極真空手の質を高める全体の仕来り、ルール作りを行い、それをもって理念を伝え続けていく。選手達は決められた事だからやる訳ですが、続けていけば意味性を持つてくる。それを理解すれば引退し実社会に入ってもあの場面ではこうした事となる。人間関係も、ここま

で言ったらルール違反だとか色んな物事を通じ、小さい頃から小さい同士でやるから組手が皆強者の組手なんです。我々の時代は圧倒的に強い人に対して向かっていかなきゃならない状況があった。13歳から一般部で運動経験のある大人と思いきりやる訳です。どうすればいいかとなった時に、もし刃物を持つていたらとか、靴を履いていたらとか、一発が致命傷になるような発想を持って組手をやるんです。

増田 館長が言うのは防衛の意識。館長は幼い頃から空手を大人とやっていたから防衛の意識が強かったし、カウンター技が身に付いた。今の子達は防衛の意識がなく、ダメージを与え合い、前進すれば良い、とやっている。ダメージの与え合いを前提にやっていたらこれ以上空手は伸びない。技術点をベースにしないと。他競技の技術が発達するのは内容が数値化出来るから。現状では一撃必殺のはずが何発当てても効かないじゃ



(上写真)1986年5月、百人組手に挑んだ松井師範。見事完遂させた。(下写真)現在は極真会館館長として後進の育成にも尽力している。(写真提供：ワールド空手)



〔上写真〕1991年5月、増田師範は百人組手を見事完遂させた。〔下写真〕増田師範が主宰するIBMA極真会館空手道では、空手の本質である武術性を再考しつつ、様々な武術、格闘技などの研究からも技術を取り入れ、体系化している。



松井 ずっと問題意識はありましたが、彼と実際にルール改訂の話をした時に確信したのは、空手の事を真剣に考えたら同じところに目がいくという事。従来の試合を問題意識なしにやり続けるのは考えられない。

増田 館長だけは解ってくれると思いました。闇雲に打ち合っただけでいいから、否定すると反発もくるけどね。

松井 成長過程の中で一時やるのは良い。打ち合いに終始しているのが問題。その先を見せてやらないと。それを示せるのはそれを経過してきた人達です。

**フルコンの意義
極真を最高で最良なものに**

増田 試し合いの競技、道場での組手も方法を変え、習練方法も変える。それがひいては刃物を持つた者に対応出来る空手にもなる。

松井 靴のつま先だつて固くて有効な武器です。そういう所を使う技術を殆ど磨いていない。手にしても色々な作業が出来るのに、握ってしか使っていない。素手足で足の指先から全て使えるようにやらなくてはいけないのに、全部潰して競技をしてきた。でも少なくとも我々世代までは明文化された反則が曖昧で、皆それを想定してやっていた。

増田 靴を使うのも技の精度です。今、精度がないんです。ただ手数出してても武術として使い物にならない。精度があれば靴のつま先なら女子の蹴りだつて効く。突きが弱くてもペンでもあれば殺傷力が出る。それな

と当たつたらすぐ「技ありか」と批判があつた。私は「お前は少しでも当てられるのか」と言いたい。当てる事の延長線上には必ず倒す事がある。呼吸を読まず叩き合つて技術が発達する訳がない。試合を通じて技術、技能を身に付けられるような競技を作り上げないと。

増田 僕は六年前から技術点を明確にして改良を加えています。当たつただけと言うけど、刃物だつたらどうするのと。それを空手をやる上で認識するべき。そういう中で稽古しないと技術技能は身に付かない。僕は館長に軸足を刈られない下段蹴りをし、後回しや上段回しができるのを読んだおかげでこういう感覚が身に付きました。

ら護身に十分役立つし、そういう認識で稽古する事がどれだけ武道空手や技術認識に効果をもたらすか。

松井 増田師範のように百人組手をこなすには正に技の精度が必要。間合いを読み、正確に当て、それがまとまり、相手に効力を発揮する。空手は自分が何をしたかではなく、相手に何が伝わったかが問われる世界。自分の手応えを探して叩き合い、気持ち良かったとやっているうちは、自分本意で組手になんかなっていい。

増田 僕は組手に技術点を付与して試し合いを変え、空手の認識を変えたい。ただの競技ではない「空手の試し合い」。練習だけでは使い物にならない。本来の空手には刃物くらい捌ける技がある。そういうものに戻さないと空手の魅力はなくなります。

― 刃物の想定からルール改訂やセミコン導入に至つたのですか？

松井 一つ二つ刺されても死なないという事は実際あるし、急所を躲して肉を切らせても相手を仕留めてしまふような世界はフルコン空手の中にあつて良いんです。ところが皆その意識が希薄な上、一発決めようという意識もない。まずはあまりに散漫になり過ぎたフルコン空手界の收拾をつけるため、改めて方向性を示すのです。

― 第1回全日本から、いみじくもちょうど五十年後、フルコンとは真逆のセミコン導入となりました。

松井 過程であつてフルコンの改訂ルールも完成形じゃない。真逆と言いますが、私の中ではアプローチを変えた同じ事です。フルコンも本来は防衛意識を持つてやるべきものですが、フルコンルールの中で皆それをしないから、敢えて抽出したものをやり始めたのがセミコンです。皆が縁あつて来た所がこの極真なのだから極真を最高で最良なものにしたいだけです。

増田 加えて、今後の極真をいかに共感させるかには新しいタレントを生まないと駄目。ただ強いだけでなく、皆が応援してくれるようなタレント。



「現在の空手」について様々な点で問題意識を共有する両師範は、それぞれが統括する団体において極真空手を最良のものにするために心血を注ぎ続けている。

松井 空手と関係のない人が立ち振る舞いを見ただけでこの人は凄いとされるような人が極真から出て欲しい。そのためには抽象的な言い方ですが、物事を正しく確実にやる事。競技も審判も公正、正確に突き、攻撃されたら受ける。突かれていくけどまあいいやという世界では駄目。窮屈だと言われても、きちつとやつていくと抜ける力は抜けて自然体で出来るようになる。そこまでやらないと。

増田 松井館長も僕も基本稽古を絶対に休まなかった。何度か彼のアパートで飲んだりしたけど、朝の基本稽古だけは必ずやる。基本稽古が突き蹴りの体のキレを生み、筋力も維持する。その前提がないと組手も応用も全て駄目です。

松井 その延長で我々が進めている改革に型の体系を

― お二人とも本日はありがとうございました。 ■